

## 【 3 】

氏 名	石 田 慶 和 いし た よし かず
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	論 文 博 第 105 号
学位授与の日付	昭 和 51 年 5 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	信 楽 の 論 理

(主 査)  
論文調査委員 教授 武内義範 教授 梶山雄一 教授 武藤一雄

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は親鸞の主著「教行信証」の宗教哲学的研究を中心としたもので、全体は三部に分かれている。第一部「現代と親鸞の思想」では、石田氏は「教行信証」を現代の宗教哲学の根本の問題と対決せしめる。論者によってここでそのような根本の問題として取り上げられているのは、結局のところ内在と超越との関係であるが、それは先ず最初に絶対と相対との関聯として取り扱われる。「教行信証」の二大部門である浄土真実の教行信証を顕かにする部分と、方便化身土を顕かにする部分との関係が、この見地から解明せられる。石田氏はこの絶対と相対との関係を、一方では中観哲学における勝義と世俗との関係になぞらえ、他方では親鸞の「浄土真実」(絶対)と「方便化土」(相対)とを、ヘーゲルの「論理学」と「精神現象学」に対応させて考察する。(石田氏はヘーゲルに於けるこの両者の関聯を、ハイデッガーにしたがって「絶対者の臨在」に結びつけて解釈する。そこに氏独自の新しい「浄土真実」と「方便化土」との理解の道が開かれる。)

絶対と相対との関係を、相対から絶対へ、世俗から勝義へ方向に於て、自己向上の道によって解決しようと求めても、そこでは絶対(勝義)は永久に到達できぬ彼岸にとどまらざるをえない。そのような絶対はこの方向の極限にある目的にすぎないし、実際には相対から見られた絶対であり、それ自身相対にすぎない。ここに絶対と相対との超えがたい断絶がある。しかしこの断絶を自覚する知見そのものは、この断絶をこえている。それが如何にして可能であるかといえば、絶対から相対への道が(絶対自身の現象としての方が)、あらかじめ絶対の方向から成立しているからに他ならない。この絶対自らの顕示の立場に於て、世俗から勝義へ、相対から絶対への道が却って具体的に施設せられる。これが「教行信証」における浄土真実と方便化土との関係である。

石田氏がこの問題を、一層精透した論旨で展開しているのは、「三願転入」に於てである。親鸞は自己の宗教的経験(回心)の深化発展の過程を阿弥陀仏の四十八願のうちの第十九願、第廿願、第十八願に対応するものとして方便化土巻に述べているが、石田氏はこの三願転入の自覚を第十八願の真実の信楽の立

場から回光返照せられたものとしてのみ、充分具体的に解明しようとする。すなわち第十九願・第廿願に相応する自力修善の宗教心は、真実の信樂（第十八願）に到達することは、もとより不可能である。それは相対から絶対へ方向であるからである。しかしこの方向の逆転（すなわち自力無効の自覚）を通じて翻えられたとき、新しく浄土真実の開顕せられる場がそこに成就し、この真理開顕の場に於て、第十九願・第廿願・第十八願という宗教的自覚の深化の系列が新しく成立するというのである。

石田氏の論旨がとくに精彩を示すのは、第十八願のうちの二種深信の解釈であって、罪の自覚と救済の確信との対立的相関のダイナミックな構造が見事に解明されている。論者はさらに親鸞の宗教生活の史実の細部にもこの三願転入の見地から、光をあてて説明している。

第二部現代と浄土教では、論者は近来実存論的神学が提出した非神話化の問題を取り上げ、浄土教的観点からこの問題の核心に迫ろうとする。そこには歴史に固有な、内在と超越の錯綜した関係が見られる。歴史は「彼岸的なものの此岸化」であるかぎり実存論的解釈の問題であり、それが単なる歴史的事象とみられる限りは、客観的叙述の対象である。非神話化論は歴史のこの二重性に由来している。

キリスト教の終末論と仏教の末法史観とは、それぞれ独自の仕方でのこの歴史の問題に関聯するものであると思うが、石田氏は、ブルトマンの積極的肯定的な終末論観を取り上げているので、末法思想よりは浄土教の救済信仰の中に働いている神話的なもの——法蔵菩薩因位の発願修行、西方浄土など——に論点を見出している。ブルトマンの非神話化論に沿うて、浄土教理の現段階においては、浄土教の非神話化が必要であることが論じられる。そうしてそのような非神話化（すなわち実存論的解釈）は、罪業や業縁の感じ取り方として、親鸞自身が既に行っているものであり、龍樹や世親をはじめとして印度中国の日本浄土教の先達（三国七祖）が、みなある程度まで、これを実行してきた解釈の方法でもある。

第三部現代と宗教では、世俗の現代的様式が別出される。現代の世俗化は宗教にとって極めて困難な問題である。しかしまさしく、そのような時代であればこそ、われわれは人間の窮極的関心にかかわるものとしての宗教本来の機能と構造を、実存哲学や実存論的神学を媒介として、またキリスト教や浄土教の伝承にもとづいて、新しく解釈し直すことが必要である。石田氏は日常的生の構造からはじめて限界況位を通じて、宗教的要求が覚醒せられる過程を解明する。日常的生の全面的転換によって回心が成立し、親鸞の所謂自然法爾の立場に於て、再び日常性が新しく平常底として回復される。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、「教行信証」に対して実存論的解釈をほどこそうとしたもので、親鸞の宗教思想に対して新しい照明を与えることに成功している。論者の努力は主として親鸞の信仰体験の精緻な論理的分析にそそがれているが、これを明らかにするために、中観思想やヘーゲル哲学に論及した部分も、論旨の透徹した優れた考察である。石田氏が三願転入について論じた際の氏の立場は、ヘーゲル・後期ハイデッガー・西田・西谷博士の学説などが、集約的に問題とされており、氏の思索力の優れている点を、よく示している。しかし問題の錯綜した全体を残りなく解明するためには、なお多くの努力を要するかもしれない。

石田氏は三願転入の論理を明らかにするために、また親鸞の史実にも必要なかぎり詳細な考量を加えている。とくに親鸞の九十年の生涯をそれぞれ三十年を一期とした、三つの時代に分け、二十九才の時に法然

にあい、彼の信仰を受けついで頃と、それから六十才まで北越坂東での自信教人信の生活に於て、絶えず自己の内面に真摯な反省を加えた年代、最後に自然法爾として自己の円熟した宗教思想を打ち出した晩年とで、三願転入の自督（覚）がその時代によって自<sup>まのつ</sup>から含蓄を変え、多彩な思想内容を現し出したことを論じているのは、上述の論理的な考察を補足するものとして頗る重要である。

とくに第十八願の信樂の解釈を、深信積の実存論的理解によって、歎異鈔の罪業の自覚に結びつけ、宗教的実存の決断と反復を通じて、自然法爾の領域にたかめようとする洞察は、親鸞の理解として適切であるばかりでなく、また一般に宗教的実存を解明する新しい可能性を開く、ということが出来る。

石田氏の業績は以上の如く重要な指示を有しているが、なお若干批判を加えるとすれば、(1)石田氏の親鸞理解には、後期のハイデッガー、禅の平常心と一脈相通じる面が強くあらわれている。したがってブルトマンの現在的終末論とも共通するような立場が強調されている。しかし信仰に於ては、救済が既に成立しているということが、同時に未<sup>ま</sup>だという反面をもち、個人としての実存においても、その歴史的現実面においても、信と証とは同一視せられえない点がやや稀薄になっている。(2)般若思想と浄土思想との関係が印度宗教思想史の問題として、一層広くまた綿密に考察されることが必要である。(3)同じように印度・中国・日本にわたって、龍樹世親等それぞれの宗教的実存の主体の内面の問題として、又問題史的な連関において、彼等の思想に就て、より周匝にして密度の高い考察がなされる必要がある。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。